影なる王女

第十章

滅びるのか……。

大伴金村は、馬に揺られながら独り心のうちで呟いていた。

東には蝦夷の乱。北の旦波と高志の挙兵。内にあっては……。

息長皇母とともに、日継の皇子となるべきであった胎児は日の光を見ることもなく狭城楯列の陵に埋められ、大王にはもはや子種はない。

大王家の行く末は、絶たれた。それを察してか、豪族どもは噂を交わしあい、しかし共に助け合うことはなく、民は田を捨てて逃げ、朝議は開かれない。

渋川にある物部荒鹿比の邸に向かう道すがら、里の早乙女どもが、腰まで泥田につかり、稲を植えていた。

国が滅ぶ……。

滅ぶべき国であったのか……とは思う。

あるいは、滅ぼすべき国であったのか。

誰が、このヤマトを滅びの危機に瀕せしめたのか。

息長皇母……春日皇后……影皇女……。

吾田媛。

吾田媛を嫌い、遠ざけようとした先の大王。
否、そもそもヤマトは、百余年の昔、御真木の大王が、かつてこの地を治めていた長髄彦を謀り誅し、奪い取った国。
血塗られた策謀が繰り返され、生み出された憎悪が、ヤマトを腐らせたのだ。
終わりにせねば……。
国とは、大王家ではない。豪族がいて、豪族に宰領される民がいて、それでこそ国家。
赤く腫れ上がった手で、頬の泥を拭う早乙女を見つつ、金村は思った。
たとえ、大王家を滅ぼしても、国を滅ぼすわけにはゆかぬ……。
だが……。
金村は、こうも思う。
彼等、民人にとっては、ヤマトの大王家に支配されようが、旦波、あるいは高志の王に支配されようが、どちらでも同じなのではないか。
これまで金村は、大伴の家の生き残りという一点を目指して策を練り、謀をめぐらした。だが、大伴が生き残り、娘はめでたく皇后の位に即き、しかし、大伴の血を引く日継の皇子は生まれることなく、国は滅亡の危機を迎えている。
息長皇母の言が脳裏に蘇る。汝はやはり、大王家の御盾。自ら王にはなれぬ男……。
大伴の家ではなく、国そのものの命運を賭けて策を巡らさねばならぬ今、金村は、国を守るための策を一つも持ち合わせず、策を練る手だてもない己に愕然としていた。

否、大伴の家ですら、今や春日皇后の意を受けた狭手彦ら若者どもが動かしていて、金村の入り込む隙はない。
彼は、渋川の物部荒鹿比の邸に向かっていた。助けを求めていた。いま、求めるべきは、賢しらな策ではなく、豪毅な誠実さではないか、と。
門の周囲には、仮拵えの苫屋が並び、兵どもが所在なく寝そべったり、佇んでいる。
東の乱を鎮めるために集められた二百の兵は、旦波と高志の挙兵によって、征東がしばし取りやめとなったため、今は新たな命を待つしかない。
いずれの貌にも、戦意はない。昼間から酒を呑んでいる者もいる。辛うじて秩序が保たれているのは、荒鹿比の人柄が大きい。金村は、すがるように、そう思いたかった。
「王宮からの詔は、いまだ下らぬか」
人を遠ざけた室で向かい合った荒鹿比は、まず切り出した。
「淡海の安曇に使いを出した」
金村は力なく応えた。安曇は、旦波との国境、比叡の山裾、淡海の湖岸に住む民である。
「変事あらばすぐ報せるよう、命じた」
「その命は大王家より下ったものか」
「否」
金村は首を振った。

「吾が命じた」
「難波(なにわ)の王宮は、何をしている」
荒鹿比は声を荒げた。
「狭手彦が、いま、難波に召されている」
「狭手彦？　汝が召されず、汝の子が王宮に……」
金村は、うなだれた。荒鹿比はため息をついた。
「主だった豪族が召されず、皇后と親しい若者のみが召されていると聞いたが……まことであったか」
荒鹿比は、もはや一族の長(おさ)としての威を失った金村を、哀れみの眼差しで見た。
「いずれにしても、二百の兵をこのまま渋川に留めておいても、兵糧の費えが増すばかりだ」
「そのことだが」
金村は貌をあげた。
「汝に頼みがある」
「頼み？」
「吾はこれより北へ赴く」
低く呟く金村に、荒鹿比は居住まいを正した。
「北へ行って何をする」

「旦波や高志の王どもと間、彼等と談合する」
荒鹿比は眼を見開いた。
「それもまた……大王家の命ではなく、汝の……」
金村は頷いた。
「荒鹿比よ……もはや大王家は滅びたも同じ」
息を呑んだ荒鹿比から眼を逸らさず、金村は続けた。
「稚建大王(わかたけるのおおきみ)には、もはや子種はない。他に、いずれ大王となるべき皇子もいない。血筋を繋げ得ぬ大王に、なんの御稜威(みいつ)があろう……」
外から、酔った兵どもの高笑いが漏れてきた。口々に何やら喚(わめ)き囃(はや)している。
「御稜威なき大王家を、どう繕(つくろ)おうと、いずれ乱れの元となる。されば、今は吾等豪族が、あるいは吾等が治める民が、如何に生き延びるかを目当てに、策を練るべきではないのか」
「汝は……」
荒鹿比が口を開いた。
「高志の軍陣に、彦湯皇子(ひこゆむのみこ)三世の王孫がいますことを期しているのか？」
「たとえ、王孫がいまさずとも……」
言いかけて金村は口を噤(つぐ)んだ。
荒鹿比は、背筋が冷たく強張るのを覚えた。

金村の策とは、大王家を差し出し、それと引き替えに、大伴の家を守ろうとしている。そして、物部もまた、否、ヤマトのすべての豪族が大伴に倣(なら)えと勧めているのだ。

「汝を止めはせぬ」

ややあって、荒鹿比は口を開いた。

「で、汝は吾に如何せよと？」

「動かずにいてほしい」

「動かずに？」

「大王より如何なる命が下ろうとも、吾が戻ってくるまで、兵を動かさずにいてほしい。吾も、弟の羽生に命じ、大伴の兵は一人も動かさぬ。吾等の兵が動かぬかぎり、難波が何を命じようと、何もなせぬ」

荒鹿比は、瞬(まばた)きもせず金村を見つめた。その瞳の微かな揺れが、心の逡巡を映していた。

その日の夜。

大伴金村は、従弟の真噛(まぐい)と、三人の下部(しもべ)のみを連れ、住吉の邸を出た。

川を遡(さかのぼ)り、淡海を目指した。

淡海から難波を切り裂くように流れ、海へと注ぎ込む大河は、沃土を運び大地を潤すとともに、時に荒れ狂い、大水を出して民の生業(なりわい)を苦しめる。

「日が暮れるまでには、淡海に着きそうだ」

大伴真噛は、川の両岸に生い茂る丈の高い蘆(あし)の原を見やりながら言った。その蘆原の彼方に、茂った草に覆われた、先の大王の巨大な塚が、その頂を覗かせていた。

三人の下部たちは、流れに逆らい、懸命に棹(さお)を動かしている。金村の目的は知らされていないが、彼等とて、北には千を越える敵がいるであろうことは知っている。どの貌も、わだかまる不安を忘れようと、棹と、泡立つ水面を見つめて動かない。

「兵を連れてゆけば、かえって討たれる」

護衛の兵を伴おうと主張した真噛を、金村はこう諭した。武装した敵が現れれば、相手も剣を抜き弓を構えざるを得ない。丸腰の相手ならば、敵も聞く耳を持とう、と。金村も真噛も、帯びた武器は、僅かに長剣一振りのみ。武具は一切着けていない。

時折、ようやく人ひとり乗れる大きさの盥(たらい)のような小舟を操る漁人とすれ違った。骨で作った針を糸で垂らし、川魚を捕る。舟板の上で、釣ったばかりの魚が撥ねていた。

「安曇の者どもか」

真噛は呟いた。川幅が徐々に狭くなり、行き交う小舟の数が増した。

宮処人と出会った民は、必ず地に額をつけて拝礼する習わしだが、川の上では、拝礼をすれば舟が転覆しかねない。だから、漁人どもは、宮処人の舟が通れば、必ず背を向けて見ない様を装う。

今にも川波に呑まれそうに揺れる小舟に尻を据える漁人どもの逞(たくま)しい背を見ながら、大伴金村は不思議と心が安らかに落ち着くのを覚えた。
血なまぐささのたちこめる難波の王都から外へ出た故か。
この川の行き着く果て、広々とした淡海、その北に聳(そび)える緑豊かな比叡の山。その山中を進んで居るであろう千の大軍に、金村は救いを見出すしかなかった。
「舟が増えた」
真噛の呟きに、金村は周囲を見回した。
確かに、右にも左にも、前にも後ろにも、合わせて十ばかり、こちらに背を向ける漁人の小舟が、取り囲むように浮かんでいる。
「構え！」
真噛が長剣に手をかけた時、漁人の一人が叫んだ。十の小舟が、いっせいに向きを変えた。漁人どもの手には、細長い棒の先端に鋭い金属を仕込んだ槍が握られていた。
「はや安曇どもは、裏切ったか」
金村は瞼を閉じた。
「変事あらば報せよと命じていたが……いっこうに報せが来ぬのも無理はない」
安曇の漁人どもに囲まれ、さらに川を遡った金村らは、淡海の北岸、比叡の山を背にした安曇の長(おさ)の家(や)に連れられ、剣を奪われ、狭い室(むろ)に押し込められた。

「吾等はヤマトの豪族、大伴の一族ぞ！」
真噛は独り喚いたが、安曇の者どもは眼も合わさず耳も貸さず、口を閉ざしたままであった。
「真噛、やめよ」
室に籠(こ)められてもなお扉を叩いて叫ぶ真噛を、金村は静かに制した。
「やがて、高志か旦波か、敵の主立った者が現れよう。それまでは無用に騒ぐな」
再び扉が開いたのは翌朝だった。
「出でよ！」
武器を手にした者が十人、金村と真噛に命じた。三人の下部どもは、恐怖に包まれたまま、室に留められた。
河原に四つの柱が建てられ、白い布幕で囲われた。
筵が二つずつ、向かい合って敷かれ、大伴金村と真噛が坐らされた。向かいの二つの筵には、まだ人は座っていない。
金村らの背後には、剣を帯びた兵が三人立っていた。甲冑を見るにヤマトの兵ではない。
「真噛」
金村はそっと囁いた。
「如何なる蔑み、嘲りを受けようと、汝は口を開くな。ただ坐していよ」

布幕がめくられた。
「額づけ！」
背後の兵が叫んだ。金村と真噛は、背を丸めて拝礼した。
足音で、幕の内の静寂が破られた。入ってきたのは五人か……。
「貌を上げよ」
向かいに坐した男の声がした。金村は貌を上げ、心臓を鷲掴みにされたような心地がした。
葛城韓媛……。
華やかに武装した韓媛が、甲冑をまとった将軍らしき男と並んで、じっと金村を見つめている。
「金村か……」
韓媛は、蒼ざめた面持ちに薄い笑みを浮かべた。
「ヤマト随一の豪族の長が、わずかな伴を連れ、何をしに来た」
「汝は……」
金村はかすれた声で言った。
「生きていたか……」
「韓媛は、高志の王の軍陣に連なっている」
隣の将軍が口を開いた。

「吾は、高志の王に仕える鹿虫。韓媛とともに、吾等が王の命で汝に会いに来た」
「高志の王はいずくに……？」
「それは言えぬ」
鹿虫ははねつけた。
「汝等は捕らわれの身。問うのは吾等ぞ」
金村はふと、韓媛の背後に静かに坐す三人の女に気づいた。
白い巫女装束を纏った女童。
白髪で瞼を閉じた女。
獣皮を身に巻き、豊かな胸乳や太股も露わに、肩をのみ巾で覆った乙女。
「まず、問いに応えよ」
韓媛は居丈高に言った。
「何故に、この地へ来た」
「和を……」
金村は、自らの策でその一族を葬った葛城の娘を前に、肩で息をしながら応えた。
「和を乞いに」
「それは、ヤマトの大王の意か」
鹿虫が問うた。金村は首を振った。
鹿虫と韓媛は訝しげに貌を見合わせた。鹿虫がまた問うた。

「では、和を乞うとは、誰の意ぞ」
「ヤマトの豪族の……否……」
金村は声を振り絞った。
「ヤマトの民の意である」
韓媛の背後で、女童が立ち上がった。
かすかに唇を震わせ、白い頬を上気させ、金村を見つめている。その瞳に、哀れみの色が浮かんでいた。
「飯豊皇女！」
韓媛は振り向いて膝を突き、厳しい声音で言った。
皇女？　金村は眼を見開いた。
では、この皇子装束の女童こそが、彦湯皇子三世の王孫？
「この大伴金村は、策に長け、謀をもって吾等葛城一族と、吾が夫なりし平群鮪の一族を悉く滅ぼした男。信じてはならぬ」
飯豊皇女と呼ばれた女童は、哀しげな眼差しで韓媛を見、静かに坐った。白髪の女が、そっと彼女の肩に手をかけた。
否。白髪の女には手がなかった。
まさか……。大伴金村は、またも胸苦しさを覚えた。この女、もしや、十七年前、眼を潰され、舌と両手を切られ、ヤマトを追われた当時十三歳の史人……・

稗田阿礼。
阿礼がその側近くにあった吾田媛の謀殺と、阿礼の追放に、金村が荷担していることを、彼女が知らないはずはない。
阿礼と韓媛。
金村の旧悪によって国を追われた女が二人、今、彼の眼前にいる。
この地に、救いを求めたのは、誤りであったか……。
金村は眩暈を覚えた。

「吾は……」
意を決し、勇を鼓舞し、金村は叫んだ。
「吾が命を差し出してもよい。今の稚建大王に代わり、そこにいます彦湯皇子の王孫を大王に御位に即けてもよい。ただヤマトの豪族と民は、慈しみをもって遇せられたく……」
「慈しみと？」
韓媛は立ち上がった。金村は屹と韓媛に眼差しを向けて続けた。
「汝が恨み……もし、吾独りを誅して鎮まるのならば……」
「汝独りの命と、吾が一族の恨みが同じだと、汝は言うか！」
韓媛は膝を突き、金村の胸ぐらを掴んだ。
「吾が願うはただ一つ！」

金村は、韓媛の手を払い、額を地につけた。
「兵馬でヤマトの地を荒らすことだけは……」
ふと、韓媛は、隣の真噛に眼を向けた。
「この者は……確か、大伴の」
「吾が従弟の真噛である」
貌を上げて応えた金村に、韓媛は薄い笑みを見せた。
「汝が従弟なるか……」
不意に立ち上がった韓媛は、足をあげて真噛の貌を蹴った。真噛は仰向けに倒れ、血を噴く鼻を両手で押さえた。韓媛は、真噛の股間を踏みつけた。真噛はのけぞり、全身をわななかせて絶叫した。韓媛は、そのまま真噛のふぐり玉を踏みつぶした。真噛は血反吐をはき、痙攣した。韓媛は、彼の喉笛に踵を載せ、頸骨をへし折った。
真噛は絶命した。

「止めよ！」
鹿虫が立ち上がり、韓媛の腕を押さえた。
「金村、見たか、汝が従弟は死んだ！」
韓媛は、返り血に塗れた頬を震わせ、叫んだ。
「一族の者を踏み殺した吾を、汝は恨むか！」

金村は、蒼白の面持ちをなおも強張らせ、両手で膝を掴んで震えていた。
韓媛は、金村の襟（えり）を掴んで押し倒した。
「吾を恨むか！」
背後で悲鳴が起こった。
飯豊が、両手で貌を覆い、地に伏して慟哭（どうこく）していた。
激しく震えるその背を見やり、すぐに眼を逸らして俯いていた韓媛は、やがて金村に向かって口を開いた。
「一族の者を殺され、それでもなお、和を乞うならば、乞え！」
そのまま、大股に幕の外に出た。
「屍（しかばね）を外へ」
苦々しげにため息をつき、鹿虫は命じた。二人の兵が真噛の屍を運び去った。
鹿虫は、飯豊に向かって問うた。
「皇女よ、しばし、休まれては？」
「否」
飯豊は貌を上げた。眼の縁が赤く腫れ、唇は苦しげに歪んでいた。
「汝が話を……」
まっすぐに金村を見つめて、一言ひとこと、吐き出した。
「詳（つまび）らかに聞きたい」

湖岸に腰を下ろし、波打つ水面を見つめる韓媛の傍らに人影が立った。
「大伴の者を、踏み殺したそうだな」
満智(まんち)だった。韓媛は不機嫌げに貌を背けた。
「飯豊の前で……むごい仕打ちをする」
並んで腰をおろした満智は、小石を拾って投げた。
「少しは、恨みが癒(い)えたか」
「癒えるものか」
韓媛は、水面を見つめたまま小さく応えた。
「然(しか)り。汝の恨みが癒えようはずもない」
平然と言う満智に、韓媛は憤然と向き合った。
「何故、汝に分かる」
「吾も、ヤマトの兵に一族を悉く殺された」
謡うように満智は応えた。
「そうであったな……」
韓媛は、膝に顎を載せ、呟いた。
「汝は……恨まぬのか？」
「誰を？」

「汝の一族を滅ぼした者を」
「恨もうにも、命を下したヤマトの女王(めのおおきみ)、吾田媛と言うたか、もはやこの世にはいない。いちいち手を下した兵を探すあてもない。何より……」
満智は、空を見上げた。
「あの頃は、吾独り如何に生き延びるか、それだけを案じていた。恨む暇などなかった」
「そうか……」
韓媛は静かに眼を伏せた。
「恨むかわりに、吾は多くの女とまぐわった。多くの女を孕(はら)ませ、吾が胤(たね)を受けた子で、地を満たそうとした」
軽く笑って、満智は韓媛を見た。韓媛は、案に相違して素直に頷き、口を開いた。
「満智よ。汝は吾に、男とまぐわい、葛城の血を引く子で地を満たせと、そう言いたいのか」
静かな声音だった。満智はしばし韓媛を見つめ、戯れめかして応えた。
「吾が胤ならば、授けてもよいぞ」
韓媛は、やや潤みを帯びた眼で応え、立ち上がった。
「汝が胤ならば、健(すこ)やかな童(わらべ)が生まれよう」

その夜。

大伴金村は、安曇の長の家の狭い室に戻された。すでに下部どもは、憔悴した面持ちで眠りに落ちている。

「彦湯皇子の三世の王孫……」

口に出して呟いたとき、飯豊がまことに王孫が否かを問わなかったことを、金村は思いだした。

疲れ切った躯を床に敷いた薄い褥（しとね）に横たえた。

真嚙を殺され、韓媛が幕の外に出でて後、飯豊の問いは、稗田阿礼が追われてよりの十七年、ヤマトの裡で起こった数々の事どもについてであった。金村が発する言葉のひとつひとつの深く頷き聞き入る飯豊に、いつしか見聞きしたすべてを、包み隠すことなく語り尽くしていた。

稗田阿礼が時折、傍らの笹葉（ささば）をして、細かな事を問わせ、笹葉は金村の語りを竹簡に書き記していた。金村はふと、偽りを交えず語ることが、長らくなかったことに気づいた。

己が、飯豊と同じくらいの齢だった頃を思い出した。住吉の浜で、古市の野で、同じ齢の童どもと駆け回った日々……。死んだ真嚙のことも思い出された。金村が、十七歳だったか、もはや童ではなくなり、大伴の一族で重い任を負わされた頃、まだ四、五歳の真嚙と初めて会った。よちよちと歩み寄り、金村の太股にすがりついていた真嚙……。

「汝が従弟には、むごい事をした……」

飯豊は、眼を伏して言った。

「あの者には……妻や子もいたであろう……手厚く遇せ」

金村の胸から鼻にかけて、熱いものが突き上げた。金村は、あたりをはばからず、慟哭した。

これほど、深く眠れたのは、何年ぶりであろうか……。

夜明けとともに目覚めた金村は、半身を起こして、両腕を伸ばした。

いつしか……言葉に偽りを混ぜることが、当たり前となっていた。偽りを交えず語ることの心地よさを、忘れていたように思えた。

かの女童が、彦湯皇子か否かは、あえて問うまい。だが、飯豊皇女を奉じることで、ヤマトは平らかなる和を、取り戻せるのではないか……。

扉が開いた。

眠っていた下部どもが、いっせいに跳ね起きた。

武装した兵が立っていた。

「出（い）でよ！」

前日の布幕の裡に、金村は引き据えられた。

向かい合うは、前日と同じく葛城韓媛に鹿虫。そしてその背後に、飯豊、阿礼、笹葉。

鹿虫は言った。

「汝の乞いは受け入れる。ヤマトの地を兵馬で荒らさない。しかし……」
緩みつつあった金村の貌が強張った。見れば、葛城韓媛が、挑発するように笑みを浮かべて、金村を窺っている。
「その前に、汝等が手で、この者を誅すべし」
金村は息を呑んだ。
「誅すべき者の名は……」
名を挙げるのを躊躇う鹿虫にかわり、韓媛が言った。
「春日皇后」
凍り付いたように動かない金村に、韓媛は追い打ちをかけた。
「汝が手でだ」

「これで……」
真噛の屍を埋めた盛り土の前で膝を突いたまま、飯豊は問うた。
「よかったのか」
背後の笹葉が、阿礼を見た。阿礼は、爪先で地面に文字を書いた。
「影皇女」
笹葉が読んだ。
「影皇女？」

飯豊の問いに、阿礼は応えず、貌を手のない腕で覆い、何か呻いた。
あだひめ……。
そう聞こえた。

「知っているか……」
難波の王宮。
稚建大王は、差し伸べた腕で春日皇后を抱きながら言った。
「吾等の母、吾田媛は、父なる先の大王に疎まれ、疎まれつつも大王の詔を奉じ、多くの人を殺した」
「そうか……」
春日皇后は、大王の胸に貌を押しつけ、呟いた。
王宮の広間で、大伴狭手彦ら若者どもが、口から泡を飛ばし、北と東に如何処するかを談じあっていた。しかし、大伴金村の行方が分からず、物部荒鹿比は、幾度命を下そうと言を左右して動かない。若い狭手彦に大伴の兵を動かすだけの威はなく、大伴と物部の兵の力なくして、如何なる策を練ろうとも、意味はない。
詔を下すべき稚建大王、そして春日皇后は、王宮の奥の寝屋に籠もり、出でようとはしない。
たとえ、北に千の兵が迫っていようとも、難波の王宮の回りは静まりかえり、穏やかな

気が満ちていた。
寝屋の隅に、皇后自ら手折った桃花が、瓶に差されて飾られてあった。大王は、鮮やかな花弁を見つめつつ、言った。
「吾田媛は、父の慈しみを求めて多くの人を殺し、また大王に疎まれ、命ぜられるままに、人を殺した。それが吾が母」
「吾もまた……」
春日皇后はそう言いかけ、口を噤み、大王の懐(ふところ)に貌を埋めた。

「皇女はここに、いましたか」
飯豊が振り向けば、高志、旦波の両王が、伴を従えて立っていた。
「金村は、すでに去った」
鹿虫が言った。飯豊は、自ら春日皇后を誅することを諾した金村の、冷たく動かない瞳を思い出した。
「果たしてあの者、娘を手にかけることができようか」
旦波の王が腕組みして言った。
「必ず、金村は皇后を誅する」
笹葉が呟くように言った。稗田阿礼が地面に書いた文字を、彼女は読み上げた。
「しかし、皇后には、影皇女とやらいう剛の者が付き従っていると聞いた」

旦波の王は言った。
「女ながら、独りで兵七十を殺した皇女が」
「金村は、それを知って諾した」
笹葉を通して、阿礼は応えた。
「影皇女も共に誅するであろう」
高志の王が言った。
「そして、御真木(みまき)の大王の血筋は絶える」
「なるほど」
旦波の王が手を打って呻いた。
「そこまで先を見通していたのか、飯豊皇女は」
飯豊は、眼を細めて笑う旦波の王からそっと貌を背けた。
昨夜、安曇の長の家の一室で飯豊と阿礼は、笹葉を介してなにごとかを談じあった。やがて、両王、鹿虫、稗田阿礼が加わった。
旦波の王は、戦を主張した。ヤマト随一の豪族が、大王の命も受けずに和を乞いに現れる。ヤマトの国を統べる者はおらず、四分五裂の模様。一気に兵を押し出せば、さほど血を流さずとも、容易(たやす)く勝てよう。血を流すのを好むのではないが、統(す)べる者の交替を民に見せつけるためにも、戦は必要である、と。
旦波の王は葛城韓媛に同意を促したが、韓媛はなぜか黙(もだ)したまま応えなかった。

そのとき、飯豊が口を開いた。旦波の王よ、汝は、田畑を兵馬に踏み荒らされ、家を焼かれ、恨みを抱く民に満ちたヤマトを、吾に統べよ、と言うのか。
口を噤んだ旦波の王にかわって、高志の王が言った。
戦はせぬまでも、先の旦波の王を謀殺する等、四囲の国々を脅かしたヤマトの大王家の罪は問わねばならない。大王家に属する者はもとより、力を貸した豪族どもも糾弾すべきである。
否。
飯豊は言った。
吾は、大王家よりヤマトを奪うわけではない。稚健大王の血筋が絶えた故に、大王家の血を継ぐ唯一の皇女として、ヤマトに迎えられねばならない。
血筋が途絶える……。旦波の王は首を傾げた。確かに、稚建大王は、子をなす能わざる躯と金村は言った。多くの財(たから)を費やして千の兵を動かし、何もせぬでは名分が立たぬ。少なくとも、ヤマトの大王家が吾等に服属した証(あかし)がなければ、国へは帰れぬ。
故に……、と飯豊は応えた。大伴金村をして、春日皇后を誅せしめる。
人々は息を呑んだ。確かに、春日皇后はヤマトの政事を独り掌中にしている。飯豊を大王位に即けるにあたり、抗う者があるとすれば、去勢され生気を失い、王宮に籠もって酒に耽るばかりの大王ではなく、春日皇后であろう。
春日皇后にすべての罪を被せることで、ヤマト随一の豪族・大伴に負い目を追わせることもできる。飯豊がヤマトを統べるにあたり、障害がひとつ減ることになる。
かくして、夜明けとともに大伴金村に、春日皇后を誅すべしとの命が下り、金村はヤマトへ戻った。
「さて」
旦波の王が言った。
「金村がみごと、皇后を誅するとして、その後を如何するか、そろそろ談合せねばならぬ」
高志の王は頷き、飯豊に言った。
「皇女も共に」
飯豊は頷いた。

湖岸から少し離れた小高い丘の樹々の茂みのなかで、葛城韓媛は半身を起こし、露わな肌や、乱れた着衣に付着した砂や葉を払い落とし、襟(えり)を掻き合わせた。
「そろそろ、行くか」
仰向けに寝そべり、草の実を嚙る満智を、韓媛は微笑んで見おろし、頬を撫でた。
「高志の大将軍が、何時までも姿を消しているわけにもゆくまい」
「否」
裳裾(もすそ)を整えつつ、韓媛は竹筒の水を呑んだ。
「いましばし、ここにいたい」

竹筒を傍らに置き、韓媛は満智の胸に覆い被さった。
「汝のように激しい女は、初めてだ」
満智は、韓媛の髪を撫でつけつつ言った。
「すべてを搾(しぼ)り取られた」
韓媛は、満智の唇を指でなぞりつつ言った。
「葛城の子で、地上を満たすため」
「それだけか？」
満智の唇を己が唇で覆い、韓媛はふと貌をあげ、笑みを消して呟いた。
「それにしても、飯豊皇女の案、よくぞ両王が諾したものよ」
「ヤマト、高志、旦波をまとめて一つの国となし、いずれ西の吉備(きび)や東(あずま)の諸国をも誘い入れる……」
満智は深く息をはいた。
「戦(いくさ)なしで、国を拡げる等、あの皇女でなければ考えも及ぶまい」
「まことに、かの皇女の案なのか？」
韓媛は、満智の貌を覗き込んだ。
「汝か、稗田阿礼か。かの皇女に策を吹き込んだ者がいるのではないか」
「否」
満智は首を振った。

「吾はただ、国の名を、大いなる和……大和とすべし、と言っただけだ」
「諸国の王(きみ)の称は残し、それぞれの地を治め、互いに交易を増やし、あい富むべし」
韓媛は、昨夜の飯豊の言を反芻し、じっと満智の眼を見つめた。
「十二の皇女に、思いつくことではない」
「飯豊が、さまざまな邑の争い諍いを鎮める時、説いたことばかりだ」
「では」
韓媛は満智から身を離して起きあがった。
「金村をして、春日皇后を誅せしめる。これも飯豊の案なのか？」
満智は応えず、韓媛の首に手を回して抱き寄せた。

「まさか汝が」
笹葉はため息とともに言った。
「父親自ら、己が娘を誅せよと強いるとは、思わなかった」
固く貌を強張らせる飯豊は、無言で鏡に向かい、櫛(くし)で髪を梳(す)き続けた。
安曇の長の家の室で、笹葉と飯豊が向かい合って坐していた。稗田阿礼は、室の片隅に背をもたせかけ、じっとうずくまっている。
「むごい仕打ちと、思うか」
飯豊は口を開いた。

「然り」
笹葉は頷いた。飯豊は、髪を梳く手を休めず、問うた。
「阿礼も、むごく思うか？」
阿礼はわずかに貌を上げ、かすかに笑み、頭（こうべ）を壁にもたせかけ、眠りについた。